論　文

調和思想からキリスト教科学へ

——癒しの思想と技法をめぐって——

葛　西　賢　太

1．はじめに

19世紀のアメリカ合衆国に生じた他の新宗教——モルモン教とエホバの証人——に比べ、キリスト教科学（Christian Science）についての、日本での研究は少ない。[1] アメリカにおいてはいずれも強い影響力を持った教団だが、日本におけるキリスト教科学の活動は、前二者に比べてきわめて控えめであり、そのためにあまり関心が払われなかったこともあるだろう。

キリスト教科学は、心身の癒しが教義の重要な位置の一つを占めている教団である。この癒しは独自で、他の諸教団の信仰治療とも、あるいは原始社会における信仰治療とも異なっている。そのため、信仰治療研究の側面から、キリスト教科学の特異性を明確にすることができるはずだ。だが実際にはこの点に注目した研究は、アメリカにおいてさえもほとんど見られなかった。

原因の一つはキリスト教科学に対する関心の偏りにある。この宗教への関心は、これまでのところ、その源泉と、医学界との関わりとに向けられてきた。

キリスト教科学はアメリカにおけるメスメリズム（mesmerism）の間接的・直接的影響のもとに生まれてきたという見方が定説である。たしかに、創始者エディ（Eddy, Mary Baker, 1821－1910）自身がこの時代に生きてメスメリズムそのものに直接触れ、[2] またメスメリズムの影響下に民間治療家となったクインビー（Quimby, Phineas Parkhurst）を通じて、治療技法としてのそれにも触れていた。このメスメリズムおよびクインビーとの、エディの影響関係をどう理解するかということに、これまでの研究・調査の関心は向けられてきた。だがキリスト教科学に影響を及ぼしたのは、メスメリズムのみに限定されないのだ。

また教義について言及される際も、死や病いの存在の否定、あるいはそこからくる医学批判などについて、医学的な見地からなされる批判的な言及のみであって、癒しの性質やその宗教的意味について外部から検討を試みた例はほとんどなかったのである。[3]

こうしたことは同時に、これまでの信仰治療研究における問題点とも関わっている。た

とえば、信仰治療とその背景となる思想の構造分析があり、治療を生じさせる治療者の権威についての社会学的な分析もみられた。だが、治療現象を脱神秘化することにこだわっているあまり、教説を副次的なものとみなしてしまうためか、宗教学の見地から治療と教説を密接に結び付けようとした研究は少なかった。対象がキリスト教科学のような新宗教である場合においては、ことにそうであった。

拙稿では、キリスト教科学の思想について、メスメリズムやクインビーとのみではなく、それらを包含した一つの時代精神であった「調和思想」[4]との関係において積極的にとらえながら、同時にキリスト教科学の思想の特異性を強調し、それを治療技法の変容という観点から傍証することをめざす。

以下で、キリスト教科学および調和思想の中から、病気に関わる教説を抽出し、これらを二つに分けて検討したいと思う。一つはわかちがたく結びついた病因論や治療理論であり、そしてもうひとつはこれらを背後から支える存在論である。後者については、調和思想における動物磁気などの物理的流体というモチーフから徐々に物理的性質が取り去られ、キリスト教科学における「心」概念へと昇華されていく過程を追う。そして前者については、この流体概念の変遷に対応する治療技法の変容を検討する。信仰治療を包摂する宗教思想においては、教説と治療とは、治療の実践に関わる諸問題を通じて、他の一般の宗教儀礼よりもより密接に関わりあうことになろう。それゆえ治療技法と教説との対応を検討していくことがわれわれに与えてくれる可能性は高く評価してよい。

エディの宗教的背景[5]も興味深い問題ではあるが、それについての検討は後の課題として残されることになろう。

それではまず、キリスト教科学について若干の解説を行うことにしよう。

2．キリスト教科学

キリスト教科学を創始したエディは[6]、幼少時から身体の不調に苦しんでおり、当時流行したさまざまな民間療法を試しもしたが、著しい改善はみられなかった。

会衆派教会のメンバーであった彼女は信仰上の問題も持っていた。カルヴィニズムにおいて説かれている厳格な神観念に従えば、彼女の病弱は神によって与えられたものであることになる。だが、神はもっと愛に満ちた存在ではないのだろうか。彼女の宗教的思索は神観念を中心に進められた。

当時流行していた民間療法であるホメオパシーの実践を通じて、彼女は病気の原因が心のもちかたにあるのではないかという考えを抱く。だが心のもちかたをかえることによって彼女自身の病気をいやそうという試みはうまくいかなかった。病気が家庭的な苦しみの

ためにさらに悪化したところをクインビーとの出会いによってとりあえずの安堵を得て、彼女はクインビーに深く心酔し、その治療思想を彼のもとで学ぶ。[7] 1866年、クインビーの死後、彼女は氷上で転倒し生命にかかわる重傷を負うが、病床で読んだ福音書の一説を通じて新たな治療法を「発見」した。それを体系化したのがキリスト教科学である。

キリスト教科学の第1の特色は、神の人間に対する慈愛と、悪の存在を許容しない完全性とを強調した神観念である。神は「原理・生命・真理・愛・魂・霊・心」(Principle, Life, Truth, Love, Soul, Spirit, Mind) という、「神性を表す大文字化」がなされた、七つの同義語で表される。[8] このような神観念を中心として一元論的な存在論が展開されている。完全な神のみが存在する。その神の反映である人間も同様に完全であるので、その人間には本来病いや罪や死はありえない。だが、それらが実在すると人間が信じているために、結果として苦しめられるのである。

第2の特色は、癒しの強調である。上述の誤った認識を改めたとき、即座に病気は癒されるとされる。実際にキリスト教科学における癒しは、この認識を改めるという点に重点がおかれている。だがそれはいわゆる積極的思考 (positive thinking) ——楽観的な世界観の代名詞としての——と同じではない。キリスト教科学独自の聖書解釈があり、それに沿って聖書と、教科書『科学と健康』(*Science and Health*)[9] を併せて読み理解することが癒しの中心となる。

キリスト教科学における「癒し」は、聖書や『科学と健康』の言葉をとおして、キリスト教科学の世界観を理解することによって、誰にでも行うことができる。それゆえ彼らは、この治療が奇蹟ではなく、法則的に生じている現象であると考え、自ら「科学」と称している。したがってまた彼らは、「信仰治療」(faith healing) という語に含まれる迷信的な色合いを避け、この治療を「霊的癒し」(spiritual healing) と呼んでいる。

キリスト教科学の機関誌には必ず癒しの体験談が載せられている。病気や怪我からの癒しのみならず、たとえば喫煙や飲酒からの癒し、無神論からの癒しなどさまざまな癖や習慣から解放されることも「癒される」ことである。[10] ここでは身体の癒しの実例を見てみよう。以下に示すのは、腸の疾患で苦しみ、手術後も結果が思わしくなかった母親がキリスト教科学によって癒されたことを子供が語ったものである。

> 「彼女［母の友人］は母に、神が『あなたのすべての不義をゆるし、あなたのすべての病をいやす』(詩編103:3) 愛であることを話してくれました。……母はその本［『科学と健康——付聖書の鍵』］に述べられている真理の数々を夢中で吸収してゆきましたが、最初から自分が探し求め祈っていたものを探しあてたことがわかりました。体力が回復しはじめました；間もなく彼女［母］は癒され、自分の好きなことがまた出来るようになっていました」[11]

次の例は自動車にはねられた会員の体験した癒しである。

「この［『キリスト教科学賛美歌』第278番の「癒されたるは、汝が苦しみ、神の愛に溶かされて」という］言葉を読んだ後、突然、私はよくなったと感じました。癒しは完了し、事故の後遺症は全くありません」[12]

もとよりこれらの例と、『科学と健康』の著者であるエディが直接に行った癒しとの間には、若干の違いが見いだせる。以下の例は、心臓発作に苦しむ女性が受けた癒しの体験である。

「彼女は私を一目見て、何も尋ねずに、誤り［誤った考えという悪しきもの］に向かって大声で話しました。イエスが病人を癒すとき、権威ある者のように話したと言われていますが……数カ月後また発作が起こりましたが、一瞬しか続かず、再び起こることはありませんでした」[13]

彼女の技法は福音書に伝えられるイエスの伝承によく似ている。だが、エディにおいて残存していたこのカリスマ的・カタルシス的な要素は、[14]その後教団内では徐々に消失した。会員自身による癒しは、すでにみたように、エディが『科学と健康』に述べた理念にきわめて近いものである。

癒しの例は無数にあるが、これらに一貫しているのは、聖書あるいは『科学と健康』を読んで理解すること、その一節を口にすることなどが、癒しを引き起こしている点である。テキストの介在という点で、キリスト教科学の癒しの形態は一貫している。癒しのための特別な身体的技法などは存在していない。癒しの専門家である実践士の行う癒しであっても、一般会員と同様である。実践士と一般会員との違いは、それに専従するか他に生業を持っているかということのみなのである。[15]

3．調和思想

(1) 時代精神としての調和思想

19世紀のアメリカにおいて展開していた民間療法は、メスメリズム以外にもたくさんあった。キリスト教生理学運動（Christian physiology）と呼ばれる節制を説いた運動にはじまり、トムソン薬草思想（Tomsonians）、そしてホメオパシー（homeopathy）、水治療法（hydropathy）、整骨療法（osteopathy）、カイロプラクティック（chiropractics）……これらがこの順にアメリカに現れた。トムソン薬草思想は1820年代のアメリカにおいて展開しているというから、メスメリズムが本格的に輸入されるより以前である。カイロプラクティックは1895年に世に出ている。[16]

アルバニーズ（Albanese, Catharine L.）は、これらの思想が、治療の技法のうえでの相

違はあっても、全体として聖なる自然状態との「調和」という共通の宗教的モチーフを持った一つの思想と見なしうるとする。また、オールストローム（Ahlstrom, Sidney E.）の考える調和的宗教（harmonial religion）とは、「特定の教会に根ざさず、十分に整えられた神学を持つわけではなく」「霊的な平静さ、身体の健康、さらに経済的繁栄までも、人間の宇宙との交流（rapport）によるものであると理解する信仰形態」と定義される。そこに述べられる調和は宇宙や超越的存在と人間との調和であるとともに、人間内部における調和でもある。(17)

ところで、私自身はこれらの定義を受けつつも、若干の限定を加えておきたい。整骨療法及びカイロプラクティックの段階にいたると、「調和」は身体の内部のみに限定され、宇宙や超越者といった身体外部との関わりが徐々に論じられなくなっていく。(18) 調和思想の宗教的性格が失われてしまうのである。従って、拙稿においては、ここにあげた例のうち、外界との関わりをとらえる水治療法に至るまでを調和思想とみなし、ことにエディへの影響の大きかったメスメリズム、ホメオパシー、クインビーの治療法について考慮することにする。

調和思想の宗教的性格がいかに重要であるかは多言をまたない。

まず、こうした調和思想について人々が語り合うとき、聖書の言語がもっとも身近にあり、またもっとも適切な表現と考えられたことを指摘するべきであろう。たとえばクインビーのテキストの中では都合よく聖書が引用され、エディはクインビーの印象を「キリストが宿っているのではないか」と記している。いいかえれば、調和思想は聖書的モチーフと融合した故に比較的抵抗なく受容されたのである。ただし、聖書の言語をそのままの形で取り上げたのみではない。聖書宗教に固有の宗教的モチーフのいくつか、ことにカルヴィニズムにおける神学上の核になる諸概念をめぐって、再解釈がおこなわれたことが重要なのである。

たとえばカルヴィニズムできわめて重要な意味を持っていた罪と恩寵の教説は、調和思想との融合によって柔軟化された。調和の理念がそれを可能にした。すなわち、人間自身によっては救いがたい堕落とされていた宗教的罪は、人間の無知による過失すなわち調和の喪失とおきかえられた。そして調和の回復は罪からの解放とみなされ、その結果身体的・精神的な疾患・不調からの癒しがもたらされると説かれたのである。(19)

こうしたことは医学思想と宗教思想との双方からの漸近をもたらし、エディにおいては新しい神観念を準備せしめることとなっている。

以下では、この「調和」をになう媒介物に注目していただきたい。

(2) メスメルからクインビーへ

調和思想のなかでも拙稿においてはメスメリズムとホメオパシーに重点をおいて検討する。この両者はとくにエディの思想形成に大きな影響を及ぼしているからである。[20]

スイス人医師メスメル（Mesmer, Franz Anton）は1774年、動物磁気（animal magnetism）という精妙な物理的流体の存在を自分が発見したと考えた。この流体は宇宙に充満して、人間・地球・天体を媒介し、またある種の技術の助けをかりて、貯溜したり他の人間へと移送したりすることが可能であると考えられた。

メスメルの「発見」を応用することにより、彼の患者であった女性の発作がしばらくの間消失したことから、彼はこの流体の理論で病気についても説明ができると考えた。彼によれば、病気の原因は人体内にあるこの流体の分布が不均等になることであり、病気からの回復は、患者の症状を誘発し、カタルシスを行うことによってなされるとされた。[21]

メスメルの弟子のピュイゼギュール（Puiségur, Marquis de）によって、患者を催眠状態にいれ、千里眼能力や病気診断・薬剤処方の能力を発現させ得ることが発見されたことは、その後の北米におけるメスメリズムの展開においてきわめて重要なことであった。1836年よりポワン（Poyen, Charles）がニュー・イングランドを横断して行った講演・実演旅行がメスメリズムの流行の契機となった。講演されたメスメリズムの存在論は人々に違和感を感じさせるものであったが、同時におこなわれた催眠状態に被験者を導き入れる実演は、強烈な印象を聴衆に焼きつけた。催眠状態の中で生じる不思議な現象――病気の癒しも、神と関連づけられるような神秘的な体験もあった――が、聖書の記述と結び付けられ、「人類にとって輝かしいもの」と考えられたのである。磁気療法はキリスト教信仰を強化し、道徳的感受性を高めると確信された。[22]

クインビーもこうした聴衆の一人であった。彼は、自分を襲った肺結核の症状が、意外な方法[23]で消失してしまったことをきっかけに、病気の心因性についての思索を深める。しかし、彼が実際にそれについて確信を持ちうるのは、1838年ポワンに出会ったことによる。これ以後、すぐれた時計職人として知られていた彼は、有名な治療家に変わるのである。

調和思想におけるクインビーの思想的影響力は、それほど大きくない。彼が発見したと主張する病いの心因性についての考えは、歴史的にはずっと以前に遡れるものであり、またクインビーの思想が公開される[24]以前に、メスメリズムの流行とそれへの反響を通じて、広く普及していた。だが、彼を通じてエディが実際の治療の場にふれ、彼の理論を基盤にして彼女独自の思想を展開していることについては、注意して論じる必要がある。両者の共通点と差異とを明確にするために、クインビーの思想を検討しよう。

クインビーの病因論と治療理論は分かりやすいものである。病気は実在せず、「病気なのだというその思いこみ」の中にある。この思いこみから患者を解放するためには、治療

者は患者の信頼をかちとらなければならない。なぜなら「治癒力は薬剤のうちにあるのではなく［患者の］医者ないしは霊媒への信頼のうちにある」[25]からである。クインビーが患者の苦痛を感じとり、「患者様の傍らに坐って、患者様自身の実感されている容態を申し述べ」それを患者が受け入れるとき「まさに彼のこの病状説明こそが治癒となる」のである。[26]

以上を見る限りでも明らかなように、彼の行っていた治療について理解するためには、彼において、患者と治療者とを媒介すると考えられた「心」が、どのようにとらえられていたかを検討しなければならない。クインビーにおいて「心」(mind) は「霊的物質」(spiritual matter) であるとされ、凝集することにより身体をも構成する流体であると考えられた。[27] 明らかにこの概念は物理的流体としての動物磁気のモチーフを継承している。

(3) ホメオパシーにおける希薄化した物質

エディがキリスト教科学を創始するにあたって最も影響力が大きかったと考えられるもう一つの調和思想が、ホメオパシーである。ハーネマン (Hahnemann, Samuel) がはじめたホメオパシーは、ヒポクラテスの主張したという治療法の根本原理「似たものは似たものを治す」(Similia similibus curentur) にしたがい、ある中毒症状は、多量に与えれば同じ中毒症状を起こす薬物をごく少量与えることにより治すことができる、と説明する。

ホメオパシーの体系で最も興味深いのは、治療を媒介する薬剤の、希釈に対する考え方である。希釈されて投与される薬物は「治癒力をますます結集させる」(potenzieren) と考えられているのであるが、その希釈は薬剤の残存を疑うほどの極端なものであった。[28] そこで、既に述べた「似たものが似たものを治す」同種の原理 (the law of similars) に加え、ホメオパシーのもう一つの特徴である極微量の原理 (the law of infinitesimals) について触れておかなければならない。

極微量の原理とは、極端に薄められた物質が、その結果として（液体が気体となるように）物質性を失い、かわりに霊性を得るという考え方である。霊性の獲得は、同時に力（生命力・治癒力）を得ていくこととともなっているのである。これがメスメリズムにおける動物磁気流体、そしてクインビーにおける「心」としての「霊的物質」のイメージにも通じることは明らかであろう。[29]

4．物理的流体から「心」へ

前節で述べた流体の概念の変遷を追ってみよう。

メスメリズムをはじめとする治療思想における流体の概念は、動物磁気というその名にも明らかなように、何よりもまず「磁気」からの類推であった。メスメルによる発見は、

磁石の使用による患者の発作の治療を通じてなされている。この流体は宇宙に満ち、天体から人間への影響力を媒介する「引力」のようなものと考えられた。だが同時にこの流体は、人間の生命力を司る存在でもあった。この流体の不均衡や、量の減少、質の低下が病気や不健康を招くと考えられた。

だがこの流体の概念は、メスメルの生前から「心」よりにとうつりかわりつつあった。まず、フランス国王の命によって組織された審査委員会により、メスメリズムによって引き起こされる現象は「想像力」の力であるとされた。[30] また、催眠状態に生じる千里眼などの非日常的な認識能力の存在によって、「磁気」と「心」の間の強い関わりを想定した者もいた。物理的流体のモチーフはなお重要な意味を持ち続けるけれども、メスメルにおけるほど中心的な概念ではなくなっている。[31] そしてアメリカにおけるメスメリズムの展開では、こうした傾向がなおいっそう促進されるのである。

かくして、クインビーにおいては、流体はそのまま「心」を指すように考えられるようになる。

「もし人が友人を海で亡くしたら、そのショックで彼の神経系を通じて身体の流体はかき乱され、また身体の周りに蒸気のようなものを形成する。その中には正しい考えも誤った考えもみな入っている。この蒸気、つまり流体の中にはその人の本体が入っているのだ」[32]

心が物理的性質をもった流体――「霊的物質」――であるという考えは、クインビーの思想の重要な前提となっている。たとえば、患者の心の持ちようによって腫瘍ができたり治ったりする現象を、彼は以下のように説明する。

「私はそれ［心］を霊的物質と呼んだ。それが固体へと凝縮し『腫瘍』という名称を持ったりする一方では、同じ力が違う方向へと働くと、腫瘍は溶解され消失させられてしまうからである」[33]

ここで注意すべきは、クインビーの思想が物心二元論でありながら、物心両者の境界が非常に不明確であるということである。そしてまた、この境界の不明確さは、前述したホメオパシーの希釈についての教説にもあらわれていたことを思い出していただきたい。物質は希薄化すると霊的な存在すなわち心となり、心は凝縮すると物質となると考えられたのである。エネルギーの増大に従って固体が液体を経て気体になり、エネルギーが減少したときその逆がおこるようにである。

さてこの物理的な流体が、エディにおいては「神の七つの同義語」の一つである「心」(Mind) という概念に昇華されている。この語に調和思想やクインビーの思想の余韻をたどることはできよう。だが、治療の場にあるのは同じ「心」であっても、クインビーにおける「心」(mind) と異なり、ここにおいては物理的流体としての性質が失われているので

ある。もはや治療力の媒介をすることもない。

このことを確かめるために、彼女のキリスト教信仰がこの概念に加えている独特の変容にも、われわれは注意を払っておきたい。この「心」(Mind) には、「神性を表す大文字化」が施されている。だがこれは最初からそうだったわけではない

1870年に行われた彼女の最初の治療法教授のためのテキスト『人間の科学』(*The Science of Man*) の、神の概念をめぐる質疑応答においては、まだ「心」概念は用いられていない。ここでは「神の七つの同義語」のうち、「心」以外の6つにおいては、「大文字化」がすでになされているが、「心」の語のみはまだ神の属性を表す語として確立していないのである。彼女は神について、「心」の語よりは「智慧」(Wisdom) や「知性」(Intelligence) の語を用いて語っている。

思想上も治療技法上もクインビーからの独立を遂げつつあった彼女にとって、「心」の用語を継続して使用すべきかどうか迷うのは当然のことであろう。クインビーの用語法における「心」は小文字で表される。この「心」(mind) 概念をまったく否定するよりは、クインビーとの差異を明確にする方を彼女は選んだ。「心」は、小文字の「死すべき心」(mortal mind) と大文字の「神性の心」(divine Mind) との二つにわけられた。キリスト教科学は神のみの存在を説く一元論的な体系であり、その神はもちろん物質性をまったくそなえてはいない。そのために、大文字の「心」においては、物質性が完全に捨象されていることに注意していただきたい。彼女は大文字の「心」(Mind) を「同義語」に加え、心の属性である「智慧」や心の活動状態である「知性」を、この「心」の下に属するものとした。[34] 大文字で「神」を示す方法は、キリスト教の歴史において伝統的に用いられてきた方法でもある。

こうした概念上の変化の意味は、文字の上での変化を追うのみでは説得力に欠けるかもしれない。だが次節に述べる治療技法の変容からも、物理的流体が「心」へと変わっていく過程を確認することができる。

5．治療技法の変容と「手の使用」概念

上述した「心」概念の変遷に対応する変化を、今度は治療技法の変容という観点から追ってみよう。

メスメリズムにおいては、流体の状態の改善が治療に本質的なものと考えられた。治療を生じさせるためには、良質で強力な流体を磁気術師から患者へと流し込んでやり、患者の身体内での動物磁気の平衡状態を回復してやればよかった。この動物磁気という流体がさまざまな物理的な性質を持ったものとして考えられていたことはすでに述べたとおりで

ある。したがって、患者と治療者との間の「交流」(rapport) による動物磁気の移行を促すための、患者と治療者との直接・間接の接触がきわめて重視された。メスメルが治療と同時に行った儀礼・身体所作は、この「交流」のためのものであった。磁気桶や樹木などを利用した器具による磁気の伝導ということも行われた。

治療者と患者との間の結びつきが、物理的な流体によるのではなく、両者の間の純粋に心理的な関係によるとすれば、接触によって流体が伝えられるとする説明は根拠のないものとなる。したがって、流体を伝えるための身体的な技法が消失し、それらが別の伝達媒体——おそらく言葉——に置き換えられるのも時間の問題であるはずだ。実際われわれがみたように、流体と心との関わりはすでに気づかれ、たびたび指摘されてはいたのである。だがこうした合理化は、ことに実際の治療技法でのあらわれにおいては、容易には進まなかった。

すでにみたように、クインビーにおける治療理論では、治療が心の持ち方の問題のみにかかっていることが説かれており、その点でメスメリズムからは独立したものであることが強調されている。だが彼の「心」概念は、「霊的物質」という、物質性が強く残存している流体として考えられており、さらに実際の治療技法においても、メスメリズム的な物質性をもった流体を伝達するための技法が見いだされる。[35] 患者による治療場面の描写を検討しよう。

> 「彼は両手を水盤に浸しました。そして、左手を患者の腹に当て、右手を患者の頭のてっぺんに当てました。彼はそれぞれの手をかるく動かし始めました。すぐに、熱い鉄を当てられているような感覚がクインビーの手から伝わってきました。……熱い感覚がしたことについて私は彼に尋ねました。『この力はどこから来る、何の力なのですか』　彼ははっきりと、『私には、どうやって、いつこの力を得たのかもわからないし、これが何なのかもわからない。私は、おそらく私から患者へと流れる電気のようなものだと思う』と答えました[36]」

水、摩擦、電気的流体といったモチーフは、かつてメスメルが患者たちを圧倒した実演の説明で現れていたのと同様のものである。メスメリズムにおいて強くみられた流体概念の物質性は、クインビーの言及とは異なり、治療技法上はまったく払拭されていない。

これらを根拠に、クインビーの治療をメスメリズムと同一視する立場もあるが、[37] すでにみたように、流体を「心」そのものともみなす点において、メスメリズムとクインビーの思想との相違は明らかであろう。メスメリズムとクインビーの思想との境界線は、彼のいう「霊的物質」における物質性と精神性との境界線のように不明瞭ではあるが、両者は少なくとも同じものではない。

エディの段階に至って、はじめて「心」概念は完全な「非物質化」を遂げる。それは「キリスト教科学」という宗教が成立する直前、彼女と弟子との治療技法をめぐる確執を通じて、独自の治療技法が確立をみることと対応する。

エディを中心とした治療者集団は、初期においては、按手に似た身体への接触を治療技法の中に取り入れていた。これが「手の使用」(physical manipulation)[38]である。この技法が流体を伝達すると考えられていたことは十分予想される。エディ自身はこの「手の使用」という、メスメリズム的な性質を感じさせる儀礼には好感をもちえず、実際にそれを行うこともなかったが[39]、初期の治療者集団において弟子達がそれを行うことについては禁じてはいなかった。前述した初期の治療法のテキスト『人間の科学』には、以下のような記述が見受けられる。

「……この［物質が実在するという信念や物質的な自分の身体に対する固執を離れた］知恵が十分体得されていない場合には、第2の方法は、頭部をこすりながらも、同時に彼の物質的な苦情や物質的な患部についてのあらゆる考え［具体的な患部に対する患者の苦痛の訴え］から、自分を引き離しておくことである」[40]。

彼女は、誤った信念を患部から「こすり出す」という形での、「手の使用」の実践を認めていた。これがクインビーが行っていた技法ときわめてよく似ていることは一目瞭然であろう。この点についての攻撃と論争とを経て、彼女はそれまで生徒たちには許していたこの「手の使用」を、完全に禁止するに至るのである。生徒たちは、それぞれの持っていた『人間の科学』の写本から、「手の使用」についての言及箇所を削除するように指示された[41]。以後、「手の使用」はメスメリズムの印という共通理解が、キリスト教科学[42]の中で成立した。

キリスト教科学においては、流体を伝達するための身体技法が、このような経過を経て、メスメリズムとの相違を意識的に強調する形で排除されている。しかし、この「手の使用」の禁止は、単にエディの恣意の結果もたらされたものではなく、調和思想とキリスト教科学との間に存在する治療技法上の重要な差異を示しているものであることは、その後現在にいたるまで、キリスト教科学の癒しが、身体技法ではなく聖書や『科学と健康』の言葉を媒介として行われていることを見ればわかる。また「手の使用」という技法がキリスト教科学における癒しの本質にかかわるものでなかったことは、その禁止の後もかわらず癒しが続けられていることを見れば明らかである。これらのことは、キリスト教科学の「心」(Mind) 概念が、メスメルやクインビーにおけるような物理的流体ではなく、まったく物質性を失った、「心」概念へと昇華されえたことを示している。

6．結語

アメリカでの調和思想の展開においては、拙論でみたものとは別の、流体が物質性を失って心に近づいていく方向を補完するような、もう一つの流れが存在している。流体の物質性が強まり、その領分が身体のうちに限定されていく方向である。たとえばカイロプラクティックにおける流体は、背骨を軸とした身体内部にのみ存在し、人間と宇宙との調和をなかだちすることはもはやない。こうした民間療法化への流れとの比較によって、キリスト教科学の形而上学的な位置をより明確なものとすることができるだろう。

キリスト教科学が調和思想の強い影響下に生じたものであることは明らかである。だがその特異性に注目すれば、エディにおける形而上学的志向が、クインビーにおいてすでにみられた「心」概念への昇華をより徹底せしめたものであり、調和思想の系譜のなかでも彼女の立場を独自のものとするものであることも、同時に明らかとなる。

拙論の主眼は、流体概念の物質性の残存度と、治療技法において流体を導くための接触という技法が消失していく度合いとを尺度として、調和思想からキリスト教科学にいたる変化をはかり、きわだたせることにあった。このことをキリスト教科学の特異性という結論に終わらせるのみにとどまらず、より一般的な結論を引き出すことがゆるされるなら、「信仰治療は教説と技法との共働作用の場であり、両者は一体のものとして関連づけて論じられるべきである」ということになろう。思想の内容だけではなく、技法という思想の形式面に、もっと宗教学的なまなざしが注がれなければならないのだ。

註

（1） 日本語で読める、キリスト教科学についてのもっとも網羅的で参考になる研究は、生駒孝彰『アメリカ生れのキリスト教』、旺史社、1981年、であろう。松野編『新宗教辞典』、東京堂出版、1984年、におけるキリスト教科学についての項も、簡単だが網羅的な紹介である。くわえて最近出版されたラーソン，M．A．，（高橋他訳）『ニューソート――その系譜と現代的意義』、日本教文社、1990年は、翻訳の問題と参考文献の偏りという難点をのぞけば、おそらく日本語で読める最初のニューソート（New Thought）についての網羅的な紹介である。ここでラーソンは、キリスト教科学をニューソートの一つの流れとして、一章をさいて扱っている。その他にもキリスト教科学の教義における死の否定などについて断片的に言及したものがあるが今回は割愛する。

（2） ちなみに、クインビーにあう以前から、エディとメスメリズムとの関わりはあった。彼女の若かった頃、あるメスメリストから、水死した学生の遺体を探すために、彼女の体を霊媒（medium）として借りられないかと求められ、承諾したという。しかし、その後の彼との関わりは

なかったとされる。Peel, Robert, *Mary Baker Eddy: the Years of Discovery*, Holt,Rinehalt and Winston, 1966, p.116.

なおエディのメスメリズムへの態度は批判的であり、ことに3番目の夫の死(1882年)後は、エディはメスメリズムを"Malicious Animal Magnetism"、あるいは「心的不正実践」(mental malpractice)と呼んで、攻撃を惜しんでいない。Peel, *Mary Baker Eddy: the Years of Trial* ,Christian Science Publishing Society, 1971, pp.112−8.

(3) キリスト教科学における癒しの問題については、最近非常におもしろい研究がロバート・ピールによって出された。Peel, *Spiritual Healing in a Scientific Age*, Harper & Row, 1987.

(4) 「調和思想」とは、オールストローム(Ahlstrom, Sydney E.)の"harmonial religion"、また彼を批判しつつゴットシャーク(Gottschalk, Stefan)が用いる"harmonialism"という用語に、私が当てた訳語である。Ahlstrom, S.E., *A Religious History of the American People*, Yale University Press, 1972. Gottshalk S., "Christian Science and Harmonialism," in *Encyclopedia of the American Religious Experience—Studies of Traditions and Movements*, by Lippy, C.H., and Williams, P.W.(ed.), Charles Scribner's Sons, 1987, pp.901−16. ゴットシャークはキリスト教科学が調和思想ではないという見解をとる。彼は、ジェイムズ(James, William)がキリスト教科学を楽観主義的な「一度生まれ型」に分類した誤解が元となって、その後の研究者もこれを調和思想や積極的思考(positive thinking)と同一視するようになってしまったのだと批判する。だが、拙稿で私が強調するように、これらとのモチーフの上での共通性は否定しがたい。むしろそこから独自の思想を展開したエディの創造性を私は評価したいと考える。

(5) 彼女が若い時代に所属していた会衆派の教会は、神学的にはジョナサン・エドワーズの方向を推し進めるニューライト(New Light)と呼ばれる流れに属していた。こうした彼女の宗教的背景については、私の修士学位論文「メリー・ベーカー・エディにおける心理学的救済論の形成」(1990年12月、東京大学大学院人文科学研究科に提出)において、エディの生活史を検討し、キリスト教科学の思想が形成される過程をみるなかで、簡単ではあるが言及している。だが後日あらためて詳細な検討を試みるつもりである。

(6) メリー・ベーカーは3度結婚している。一人目の夫グローバー(Glover)は病死、二人目の夫パタソン(Patterson)とは離婚、教団運営上のよき協力者であった三人目の夫エディ(Eddy)は病死している。1879年の教団設立時はパタソンとの離婚の後で、彼女はグローバー姓を名乗っていた。多くの場合、彼女はエディ姓で呼ばれる。したがって、註(5)で言及した修士論文では、彼女の生活史に注目するためにメリーで統一したが、本稿では便宜上エディで通すことにする。

(7) この滞在中のクインビーとの思想上の影響関係については、クインビーの草稿の原本の多くが処分されてしまっているため、正確なところは不明である。だが、エディがすでにホメオパ

シーを通じて病気の心因性についての思想を形成していたらしいことから推察すれば、彼女からクインビーへの影響関係も十分考えうる。

（8） エディ『科学と健康――付聖書の鍵』（教会認定日本語版）、Christian Science Board of Directors, 1976年，115頁ほか。なおこれらの大文字化に対応して、日本語版ではゴシックにする定めとなっているが、拙稿ではとくにこれに従ってはいない。

（9） 1875年刊行の『科学と健康』初版にはたびたび改訂が加えられ、後に『聖書の鍵』と称する部分が加わり、『科学と健康――付聖書の鍵』（*Science and Health—with Key to the Scriptures*）という名称になった。なお拙稿では、現行最終版の『科学と健康――付聖書の鍵』をさすときはそのように、『聖書の鍵』追加以前の版をさす場合や、それらを含めたすべての版をさすときは「『科学と健康』」とのみ記す。

（10） たとえば『キリスト教科学さきがけ』（*The Herald of Christian Science*）日本語版の最近の号をみれば、1987年10・11・12月号（第26巻第4号）に無神論からの「癒し」の例があり、1988年10・11・12月号（第27巻第4号）には喫煙からの「癒し」の例が語られている。なお体験談の機関誌掲載に当たっては、本人以外の3名の確認・保証を求める定めになっており、その信憑性は高いと思われる。ただし、癒しの技法そのものについて詳しく触れられている体験談は残念ながらそう多くはない。

（11） 南アフリカ共和国の会員の体験。『キリスト教科学さきがけ』日本版、1986年7・8・9月号（第25巻3号）より引用。

（12） 『キリスト教科学さきがけ』日本版、1987年7・8・9月号（第26巻3号）より引用。ブラジルの会員の体験。

（13） 1886年、レイスロップ（Lathrop, Laura）夫人の体験から。強調は葛西による。Smith, C.P., *Historical Sketches from the Life of Mary Baker Eddy and the History of Christian Science*, Christian Science Publishing Society, 1969, p.73. これは、*Christian Science Centinel*, Vol.VII, p.259, からの引用である。なお、エディは1885年になって患者をとることを公式には止めることを周囲に伝えている。それゆえ、エディ自身による癒しの体験の多くは1867年から1886年までのものであるが、それ以後も非公式に彼女が治療した人の数は少なくないようだ。

（14） 「残存」といったのは、エディにおいてはそうした要素が減少し、治療技法の弟子たちへの伝達がいっそう容易になっているからである。クインビーの弟子たちがいずれも生前の彼から治療法を受け継ぐことに成功していないことと比較しても、エディの弟子たちにおいて、エディの治療の能力は達人のみに付与されるカリスマ的なものではなく、伝達可能な合理的なものとして考えられていたということができる。

（15） むろん実践士となるための資格要件は存在する。

（16） Albanese, Catharine L., *Nature Religion in America—from the Algonican Indians to the New Age*, University of Chicago Press, 1990, pp.124—50. また Fuller, Robert C., *Alternative*

Medicine and American Religious Life, Oxford University Press, 1989.

(17) Ahlstrom, op.cit., p.1019, および Albanese, op.cit., pp.132−3。

(18) Albanese, op.cit., p.142.

(19) Ibid., pp.117−49.

(20) むろんエディが関わったこの時代の思想はこれだけではない。節制的なグラハム食事法 (Graham diet system) や水治療法などにもふれているし，禁酒運動などにもかかわっている。だが、彼女の思想形成に及ぼした影響を検討するなら、メスメリズムとホメオパシーという二つの調和思想がもたらしたものは圧倒的である。またこれら調和思想が通有する流体というモチーフの存在は、とくに流体の概念が明瞭なこの二者をもってエディに関わったすべての調和思想を代表させる十分な理由となる。

(21) エレンベルガー，H.（木村・中井訳）『無意識の発見——力動精神医学発達史』、弘文堂、1980年、上巻71頁。

(22) Fuller, *Mesmerism and the American Cure of Souls*, University of California Press, 1982. pp.1−19,22,174. また、Fuller, "Mesmerism and the Birth of Psychology," in Wrobel, Arthur(ed.), *Pseud-Science and Society in Nineteenth Century America*, Kentucky University Press, 1987, pp.214−8。

(24) 健康のための乗馬を薦められたが、たまたま四輪馬車に乗ったら症状が全て消えてしまったという。Parker, Gail Thain, *Mind Cure in New England−from the Civil War to World War I*, University Press of New England, 1973; reprint, University Microfilms International, 1990, p.3.

(24) ドレッサー夫妻 (Dresser, Julius & Anetta) をはじめとした、患者たちの中でも熱心な者たちが、後に彼の理論を体系化する努力を行っている。Dresser, Annetta G., *The Philosophy of P.P.Quimby*, 1885, あるいはDresser, Julius A., *The True History of Mental Science*, 1887, などはそうした努力の成果であるが、クインビー自身の手になる草稿の公刊は、早くから予告されながらなかなか実現しなかった。それはジュリアスとクインビーの息子が、時期尚早と考えて草稿の公刊を許さなかったためらしい。1921年になってやっと、夫妻の息子ホレイショ (Dresser, Horatio W.) が、これらの約三分の一を編集し、『クインビー草稿』(The Quimby Manuscripts) として出版した。500頁近いこの書物は、ごく最近まで、クインビーの思想を知るためのほとんど唯一の一次資料であったが、1988年になって、クインビーのすべての草稿を整理・掲載した『クインビー全集』が刊行された。Seale, Ervin(ed.), *Phineas Parkhurst Quimby: the Complete Writings*, De Bross, 1988.

(25) Dresser, Horatio W., *The Quimby Manuscripts*, The Citadel Press, 1961, p.47.

なお、ここで用いられている「霊媒」(medium) の語は、当時のアメリカでのメスメリズムによる治療が二形態あったことを反映している。一つは、患者と治療者に加え、催眠状態において診断や処方を行う「霊媒」をおくという形であり、クインビーの周辺では多くみられたようであ

る。もう一つは患者に催眠をかけると、催眠後患者の病気が治ってしまうという形である。それにしても、この「霊媒」の語がスピリチュアリズムにおけるそれとほとんど同じ意味に用いられていることは、この時代に流行を見たスピリチュアリズムが調和思想に巻き込まれている状況が察せられて興味深い。註(39)のクラフツの証言とも比較していただきたい。

(26) Ibid., pp.150－1.

病気の心因性についてのエディの言及は、クインビーのものとよく似ている。

「患者に彼が病気であると告げたり、病気に名を付けたりしてはならない、なぜならそのような行動は、病の基礎である恐怖心をつのらせ、また間違った“心の絵”を、さらに強く焼きつけることになるからである」『科学と健康――付聖書の鍵』453頁。

だが、後述する、「心」概念の比較と、治療技法上の比較を見ることによって、エディの場合においては、病気の心因性という考えがより徹底していることが明らかになるはずである。

(27) Ibid., p.80.

(28) たとえば、神経症に効果があるとされる薬剤の希釈度は100億倍ということであった。坂口弘『ホメオパシー療法』、医歯薬出版、1961年、7-8頁。

(29) Albanese, op.cit., p.133.

(30) エレンベルガー前掲書、175頁。

(31) Fuller, *American Cure,* pp.11－3.

(32) Dresser, op.cit., p.78.

(33) Ibid., p.61.

(34) Peel, *Discovery,* p.235,249,271,356n.「心」(Mind) 以外の語は、1872年の時点で「神の同義語」として用いられている。キリスト教科学の「教科書」と言われる『科学と健康』が刊行されるのは1875年であるが、キリスト教科学の思想はこの1872年の時点で固まったとみてよいと思われる。さまざまな教説、そして『科学と健康』のたびたびの改訂も、教説の核となっているこの「神の同義語」には及んでいないからである。なおこれに「心」が加わって「神の七つの同義語」となるのは、『科学と健康』、第2版（1878年）からである。

(35) クインビーがメスメリズムとの相違として示している点は、彼自身が霊媒であることと、彼が薬剤を治療に使用しないことの2点のみである。Dresser, op.cit., pp.47－8, 76－9, 150－1, etc.

(36) Smith, op.cit., p.50. クインビーの最晩年に、治療を受けた夫に同伴したジェイン・T．クラークの治療体験から。

(37) Peel, op.cit., p.158.

(38) キリスト教科学で正式に採用している訳語である。奇妙だが、「身体操作」という直訳よりも、どのようなことを指すのかよくわかる。

(39) 教会側の資料において、何人かの証言によってこのことは確かめられている。たとえば、エディの治療法の「発見」の後、彼女の最初の生徒となったクラフツ（Crafts, Hiram S.）の証言

を引いておこう。

「エディ夫人は、頭や体を擦ったりするようにとは、決して教えませんでしたし、あらゆる身体操作をすること（manipulate）についても同様でした。わたしがスピリチュアリズムを信じていた時は、よく水を使って頭や手足や身体を擦ったものでしたが。」Ibid., p.213.なお、この当時の彼らのテキストは、後の『人間の科学』ではなく、マタイ福音書の14～17節であった。

(40) 強調は葛西。Ibid., p.234.

(41) Ibid., p.265.

(42) キリスト教科学は、『科学と健康』が刊行され、教義が確立するまでのある時期、「道徳科学」(Moral Science) と自らを称しており、この当時はちょうどその呼称が使われていた。

From Harmonialism to Christian Science——on the Ideas and the Arts of their Healing

Kenta Kasai

Christian Science is one of the much influencial religious sects in the modern United States, especially in the field of publishing and medicine. However, there can we find only few researches about its healing practice even in the United States, and, as a matter of course, in Japan. This is a study about the transition and development of the idea and the arts of the healing from the Harmonialism to Christian Science.

In harmonialism I include mesmerism, homeopathy, hydropathy, etc. Harmonialism is defined as an unorganized religious movements, which understands that a person's harmonial rapport with cosmos (or God) has much influence on his/her spiritual composure and physical health. But other than "rapport", one more important motief of harmonialism can I show you. It is the conceptions of half-materialistic fluid (for example, "spiritual matter") as the media of rapport.

Many students refer to Christian Science as one of the cases of harmonialism. Perhaps it is true to their ideas of the psychosomatic causes of diseases, but Christian Science has neither conceptions of "rapport" nor that of materialistic fluid. The materialistic conceptions of fluid changes into a metaphysical conception of "divine Mind" of Christian Science.

We can show you another same change as the transition of the conception of the fluid, in that of healing arts. The commonest arts of healing of harmonialism, especially in the case of mesmerism, are "therapeutic touch" or "rubbing", which is done to transmit the fluid into the affected body organ. But in Chrisitian Science, they had no conceptions about such fluid so there are no arts to pass the fluid.

These two points also show where Christian Science is to the strand of harmonialism. And my study can be some critic to the tendency of the contemporary research of faith healing, which is apt to focus only on the thought or cause of healing.